報告

「バークレー日記 -Tom's Bar での日々-」

吉川 大弘*

1. はじめに

初めこの海外滞在記の執筆を依頼された時、“困ったな”というのが正直な気持ちでした。というのは、僕の渡航目的は、英語に対する苦手意識を少しでも克服したいというもので、実際、むこうでも、たいした研究は行ってこれませんでした。9ヶ月にわたる滞在の感想は、純粹に楽しかったというものであって、海外滞在記を書いたとしても、学会誌にふさわしいもの、また、読者の方々が期待されているようなものを書けるとは思いません。ただ、“ファジィ学会からお金をもらって行ったわけではないのだから、そんなに責任を感じることもないだろう”と開き直って、日記のつもりで書かせていただきます。

2. 渡航にあたって

上でも述べましたが、僕の渡航目的は、“英語”でした。それまで、国際会議等で発表する機会も何度かあったのですが、僕は昔から英語が苦手で、それまでの英語の発表はすべて、“テープレコーダー”でした。とにかくしゃべることをすべて丸暗記して、発表当日はそれを何も考えずにしゃべる。そんなやり方でしのいでいたのですが、今後、自分に英語が必要なことは十分にわかっていたので、何とかしなきゃと思い続けていました。そこに、ドクター取得後、1年間のフリーな期間ができ、僕の恩師である古橋先生が、「1年間あったら、お前は絶対遊んで過ごすだろう。どうせ遊ぶなら、アメリカ行って遊んでこい。」と、アメリカへの留学を提案してくれました。これはちょうどいい機会だと、そ

の提案をありがたく受け入れ、ザデー先生のBISC(Berkeley Initiative in Soft Computing)グループを紹介していただきました。

当初、留学は3月末から1年間の予定でしたが、ビザ取得に必要なIAP-66という書類が、何度催促しても送られて来ません。結局、この1枚の書類をいただくまでに3ヶ月かかり、出発は7月となってしまいました。これはあちらでの事務のシステムを知って初めて理解できたのですが、なんか書類を出すとき、それぞれのパートに対して担当の人が決まっていて、その担当者がいないと次のステップへと進めません。ところがそういった事務の人などがちょくちょく休暇をとっていて、その人が帰ってくるまでその書類は停滞。やっとその手続きがすんだと思ったら今度は次のステップの担当者が休みを取ってたりします。また、総合受付みたいな人がいなくて、誰に聞いていいやらわからずたらい回しにされた経験も何度もあります。僕が大学のアカウントをもらうときにも、1ヶ月ほどそんな苦労が続きました。これから留学を考えている人は、なにはともあれ、IAP-66の手続きを早めにしておくことをお勧めします。

3. 魔の独立記念日

そんなこんなで、ようやく到着したのは7月2日の水曜日でした。その日は僕のスーパーバイザーのMasoudと、BISCグループの方々に簡単にあいさつ、次の日は書類書きで終わってしまい、4日が祝日だと知ったのは当日の朝。ちょうどその日が金曜日だったので、着いて早々3連休を迎えてしまいました。まだ友達もなく、どうしていいかわからず途方にくれたまま何故かサンフランシスコ空港に向かっていました。その後、ふと我に返るとラスベガス行きの航空券を手にしていました。

* Tomohiro YOSHIKAWA
三重大学工学部電気電子工学科

(3連休当日に空港で買ったので、随分高かったです。)結局、3日間眠りもせずにやり続けたギャンブルで、生活資金の一部(?)を失い、変わりにヒルトンホテルのVIP会員カードを手に入れました。金曜日が休みでなかったら、行って早タドル建ての送金をお願いしたりしなくてもすんだのにと、後悔の滑り出しとなりました。

4. オフィスについて

僕は、Masoud Nikravesch という、BISC グループのポスドクの方の下に所属していました。結局、最後まで誰が BISC グループのメンバーなのか把握出来ませんでした。メインのメンバーはおそらく 4,5 人だったと思います。(その内の 1 人である Michel Lee も、僕の滞在中にフランスへ行っていました。)メンバーの人達はそれぞれ、独自に仕事をしていて、週一回行われる BISC セミナーにみんな集まるというぐらいで、普段はあまりグループとして何かやっているという感じではありませんでした。そもそもザデー先生が、非常にご多忙な方で、世界中の学会に飛び回っているのです。僕が初めてザデー先生に会ったのは 1 ヶ月後のことでした。

僕のスーパーバイザーの Masoud は、BISC のメンバーですが、所属は UC Berkeley ではなく、Lawrence Berkeley Laboratory (大学院大学みたいな感じです。)で、自分でスポンサーとなる企業を探してきて研究を行っていました。僕のオフィスも LBL の方にあったのですが、これは UC キャンパスの隣とはいえ、山の中にあって、とても急な坂を登らねばなりません。幸い、無料バスが巡回してるのでいつもこれを利用していたのですが、このバスが随分時間にルーズで、10 分毎と言いながらひどいときには 30 分以上待たされることもしばしばでした。キャンパス内からオフィスまで、2つのバスを経由しなければいけないため、すぐ近くに住んでいながら、片道平均 30 分以上かけて通っていました。

5. オフィスマイト

向うではプライバシーが重んじられているためか、基本的には研究者一人一人に個室が与えられています。日本で、研究室の仲間全員が同じ部屋にいてという状態に慣れていた僕は、最初とまどうと同時に、少し孤独感を感じてしまいました。BISC グループの人達のオフィスは、UC キャンパスにあるので、BISC セミナーの時以外は会うことなく、LBL には、僕と Masoud だけで、オフィスも僕が 1 階、彼が 2 階にあり、彼以外の研究仲間はいませんでした。従って、ともすれば朝オフィスに行き、夕方帰るまで誰ともしゃべることなく家に帰るという研生活となり、こちらに来た“英語”という目的が果たせないのではと、あせりかけたころ、オフィスマイトができました。

僕のオフィスは、ビジター用の臨時部屋で、(幸い、窓はありました。)最大 3 人まで入ることができます。当初は僕 1 人で使っていたのですが、ドイツから来た同じくビジターの人が 2 週間だけ、臨時で部屋を使うことになりました。彼はもちろん、研究もグループも全然違うのですが、とても気さくでいい人で、毎日色々しゃべったり、一緒にコーヒープレイクをとったりしてました。

彼が部屋に来て数日後、「週末に友人とエンジェル・アイランドという島に遊びに行くから来ないか。」という誘いを受け、それまで 2 週ほど孤独に週末を過ごしていた僕は 2 つ返事で OK しました。彼の友人は同じくドイツ人だったのですが、僕が

写真 1 初めて友人と過ごした週末
(エンジェル・アイランド)

一緒にいるため、彼ら同士の会話も英語で行ってくれてました。また、僕の英語力をわかって、僕にはゆっくり話しかけてくれました。残念ながら、その時点では、何か話しかけられても返事をするのが精一杯で、ろくろく会話になりませんでした。彼らの優しさにふれ、楽しい週末を過ごすことができました。

6. Masoud について

スーパーバイザーの Masoud は、バイタリティーの塊のような人で、いつもものすごく忙しそうにしている、しゃべり方もすごく早口です。Masoud の話では、LBL でポスドクの人が大学に雇ってもらった場合(日本で言う助手に相当するみたいですが)、学校から給料がもらえるのは最初の9か月だけだそうです。(スタンフォードでは、6か月だそうです)その9か月の間に、スポンサーとなる企業を見つけてこない、それでクビだそうです。もちろん、スポンサーをみつけるのは、そう簡単なことではなくて、学会とかでしっかりとした発表をして、企業に自分と proposal を売り込まないといけません。競争率も相当高いそうです。向うでは、基本的に終身雇用という制度はなく、ある期間になんらかの結果を出さないとクビ、というかなり過酷な環境で仕事をしているため、みんなやはり能力も高く、真剣に仕事をしています。この話を聞いて、Masoud のエネルギーが理解できました。

彼と研究に関してディスカッションをすることが多かったのですが、彼が早口なせいもあって、実は何を言っているのかさっぱりわかりませんでした。しかも僕の英語力では言いたいこともうまく伝わらず、最初の頃はディスカッションになっていませんでした。彼の言っていることが理解でき、こちらの言いたいことも伝わるようになりだしたのは、僕が帰国する3ヶ月くらい前になってからでした。それまでは、色々な行き違いがあって、かなり時間を無駄に費やしてしまいました。

7. 研究環境

ディスカッションのこともありますが、僕の研

究環境が整ったのは、3ヶ月ほどたってからのことでした。日本の研究室にいたころは、優秀なスーパーユーザがいて、すべての環境が整った状態でコンピュータを使うことができ、何かわからないことがあったらスーパーユーザに聞けば何でも教えてくれていたため、僕はコンピュータやネットワークに関する知識は皆無でした。向うで研究を始めて、このスーパーユーザのありがたみを痛感しました。向うでは、IP アドレスにしろ、コンピュータにしろ、はい、と渡されるだけで後は自分で何とかしなければなりません。また、コンピュータのすべてを知っているスーパーユーザのような存在がなく、ネットワークやらアカウントやらで分担して担当者が存在しており、しかもその担当者が誰であるかを知っている人に当たるまでにものすごい労力を費やします。そんな苦勞と、コンピュータ到着の遅れもあって、3ヶ月間設定に苦しみ日々が続きました。

8. I-House の夏

僕は滞在中ずっと I-House(International House)を利用していました。シングル部屋・食事付で、1ヶ月約\$1,000 でした。(パークレーの状況からすると、食事付で\$1,000 なら、無茶な値段ではないです。)部屋は5、6畳のやや縦長の部屋ですが、1人で住む分にはそんなに狭くはなかったです。ただ、学部生はダブル部屋しか取れないのですが、部屋の広さは同じなので、そちらは明らかに狭すぎです。僕が着いたのは、夏休み期間の途中だったため、みんなそれぞれすでにグループができていて、1週間程はなかなか溶け込めず、1人で食事する毎日が続いていました。しかしこれではいかんと思い、夕食時に話しかけた2人組から、友人が広がりました。

その2人組は、それぞれ台湾と香港出身でしたが、アメリカには5年以上いて、1人はグリーンカードを持っていました。彼らはとても気さくない人達で、ダブル部屋に住んでいたのですが、僕と階が一緒だったこともあって、それからしょっちゅう部屋に遊びに行っていました。当時、彼らの言っ

てることはほとんどわかりませんでした。会話も続かない僕をいつも快く部屋に受け入れてくれました。彼らは部屋に色んな食べ物を置いていて、夜中によく味噌汁やラーメンを作って一緒に食べてました。彼らの内の1人T君は武器が好きみたいで、色んな武器の雑誌を持ってました。それだけでなく、(彼らは2人とも化学学科だったんですが、)研究室から色んな薬品を持ってきて、チェリーボムというのを作っていました。一度、窓から投げのを一緒に見てたのですが、癩癩玉の大きいものみたいな感じで、落下するとそれなりの破裂をします。

ある土曜日、僕はBISCの1人のFrankのバースデーパーティーに呼ばれて参加してました。帰って、彼らの部屋をノックしてもいませんでした。その後2日ほど姿が見えず、どうしたのかなと思っていたら、彼らの友人の1人から、警察に捕まったとの知らせを受けました。新聞によると、ちょうどその土曜日、学校からドライアイスをとろうとしていたT君が、警察に見つかり、ドライアイス・ボム作成の疑いがあるため、警察が部屋を捜索し、数々の爆弾制作材料を発見したということでした。

写真2 みんな仮装して踊りまくるハロウィン・パーティー

T君は遊びでチェリーボムを作っていただけなのですが、発見された材料は、爆弾を作るのに十分な物だったため、テロリストとして捕まってしまいました。材料を持ってきたのも作ってたのもT君だったのですが、ルームメイトのもう1人は、知っていながら報告しなかったということで、共犯として捕まってしまいました。この事件は僕もものすごいショックでした。こちらで出会った1番の友人がいきなり捕まってしまったのですから。僕は裁判の証人か何かで、彼らは爆弾を作るような連中じゃないことを証言したかったのですが、僕も捕まるだけだと、周りのみんなから止められました。しかし実際、その日はたまたまバースデーパーティーに行っていたのですが、そうでなければ、おそらく僕も彼らの部屋にいましたから、そうなら、間違いなく僕も捕まっていたでしょう。彼らはバークレー追放となり、(大学ではなくバークレーそのものです。)1万ドルの保釈金を払ってLAの実家で裁判待ちとなりました。その後、連絡が途絶え、裁判でどうなったかはわかりませんが、夏の終わりまで僕自身も落ち込んでいました。

9. I-House Life

そんな夏も終わり、Academic Yearが始まってI-Houseががらりと変わりました。夏の間は、I-Houseのほとんどはアメリカ、ドイツ、フランス、韓国人しかいなかったのですが、秋からは名前の通りInternational Houseとなりました。夏にはあまりいなかった日本人も留学生としてたくさん入ってきました。そのほとんどが東大生なのは、さすがバークレーといったところでしょうか。僕も部屋が変わり、向いのダブル部屋にTransferでバークレーに来たHiroという親友ができました。彼はアメリカ生活は3年で、英語は何の不自由もなく話しましたが、暗黙の了解で、僕との会話はすべて英語で行っていました。彼に限らず、僕は日本人同士でも英語で会話するようにしていたのですが、女の子の大半はやはり違和感を感じるらしく、

こちらが英語で話しかけても日本語で返ってきました。(いちおう述べておきますが、彼女らはしゃべれないのではありません。彼氏が外人とか、昔住んでたとか、高校からアメリカ住んでるとかで、何故か女の子は英語はべらべらという子ばかりでした。)

I-House は、何より色々な国の人と知り合いになれることが最大のメリットです。食事の時間になると基本的には全員が食堂に集まるので、友人を見つけるとそのテーブルに行ってしゃべってました。またそこで、友人の友人など輪がどんどん広がっていきます。僕はこの時間が大好きで、色々な友人とテーブルを囲んで2時間以上食堂にいたこともしばしばでした。

ただ、その食事の味は、耐えられた物ではありませんでした。僕は比較的、何でも食べられる方で、あまり食事をまずいと思ったことはないのですが、そんな僕でも、フルーツしか食べる物がないなんてことがたまにありました。カードチェックによるポイント制で、週19回の食事の内、15回のペースで食事を取らないと、後で追加料金を払わなければいけないシステムだったのですが、誰1人としてポイントを使い切った人はいなく、むしろ「俺100ポイント以上あまっちゃたよ」なんて言っている人がほとんどでした。僕も週末は必ず、みんなと外へ食べに行っていました。でも I-House がそのあたりの寮では一番おいしく、他の寮ではどんな食事がだされているんだろうと、不思議に思いました。

I-House では、色々なイベントがあって、僕は片っ端から参加していたのですが、その中でも僕が好きだったのは、毎週月曜日の“Social Danse Lesson”でした。日本では、社交ダンスをする機会がないため、もちろん僕は社交ダンスなどやったことはありませんでしたが、初心者用に簡単なステップから教えてくれるので、十分に楽しめました。あまり日本人で参加する人はいなかったのですが、割と男女共に積極的に出ていて、毎週広いホールがいっぱいになるほどの参加者でした。また、大小あったものの、2週に1回くらいのペース

で土曜日に Dance Party あって、みんなで部屋でさんざん飲んでから踊りに行っていました。

10. Tom's Bar

僕はビールが大好きなので、ビールの安いアメリカは正に天国でした。バドワイザーで、1缶約70セント!2週間に1度ほど、友人にスーパーへ乗せて行ってもらって、24本入の箱で5、6箱と、4ℓで\$10ほどの安いワインを2、3本買込んで部屋に置いてました。そして毎週のように平日1回と、金・土曜日に部屋で飲み会を開いていました。大抵は夜遅くに始まって、友人に片っ端から電話をして部屋に呼んで、朝の3時や4時くらいまで飲んでました。いつしかみんなは僕の部屋を“Tom's Bar”と呼ぶようになっていました。ただ、僕の狭い部屋に多いときは10人以上の人が集まって朝まで騒いでいたので、近くの部屋の人達に随分迷惑をかけてしまいました。(後半はさすがに苦情が出て I-House を追い出されそうになりました。スタッフに友人がいたのでなんとか助かりました。)

11. BISC ワークショップ

ちょうど僕が帰国する3月に、BISC ワークショップが開かれました。そのワークショップ中、昼2時間と夕方1時間半を1セットで3日間、ソフトコンピューティングの講習会があったのですが、その内の1日を僕がやることになってしまいました。内容は、GA と僕の“DNA コーディング法”の講習を昼に行って、夕方に向うで行った研究の発表をしてくれとのことでした。さすがにこれに

写真3 Tom's Bar にて

は青くなってしまいました。いくら8ヶ月間向うにいたとはいえ、英語に対してそれほどの自信があったわけではなく、ましてやそれまでの英語の発表はせいぜい20分が最長で、丸暗記で臨んでいたわけですから。発表前3日間、徹夜のOHP作りが始まりました。その時初めてI-Houseの図書館を使ったのですが、I-Houseのみんなは僕が仕事をしているところなど見たことなかったの、会う度毎に「何が起こったんだ」と聞かれていました。ようやくOHPが完成したのは当日の朝でした。もちろん、発表練習などする暇もなく、不安なままの発表となりました。

発表はやはり、スムーズにいくはずもなく、大分たどたどしいものとなりました。途中で席を立つ人や、寝ている人を見ては自己嫌悪に陥りながらの発表となりました。ただ、夕方になってからは、講習を希望した十数人だけの発表となったせいか、発表中に質問がどんどん出てそれに答えながら進める内、自分でもわかりやすく発表できたと思います。実際、夕方からの方は評判も上々でした。それまで丸暗記だった英語の発表が、ある程度は考えながらできるようになったこと、逃げ出さなくなっていた質疑応答が、なんの苦もなくできるようになったことは、自分への大きな自信につながりました。

12. Farewell Party

いよいよ帰国が月曜日と迫った最後の土曜日の夜のことでした。日曜日にみんながFarewell Partyを開いてくれるということで、最後にどこか行くか、飲むかしようとみんなに電話したのですが、Hiro以外誰もいません。しかもPartyの幹事であるHiroが、次々と参加予定者のキャンセルを教えてくださいました。“寂しいけど、みんな忙しいから仕方がないか”と、せめてHiroとどこかへ遊びに行こうとすると、彼が“Cafe 潤”へ行こうと提案しました。Cafe 潤は、パークレーにあるJapanese Barで、味も雰囲気も日本のカラオケバ

ーという感じの店で、僕たちもたまに利用してました。行く途中、彼は「みんな冷たいな」などと言っていたのですが、店に入ってみると、いきなりクラッカーの嵐。しかもよく見ると、彼が先ほどキャンセルだと言っていた人達も含めて店いっぱいに友人達が集まっていました。きょとんとする僕に「実はFarewell Partyは今日なんだよ」と、Hiro。もうびっくりするやら感動するやらで、最高の夜を過ごしました。

日曜日、荷づくりを終えて、数人と部屋で飲んでいたので、みんなが入れ替り立ち替り部屋に来て、話したり写真を撮ったりと、僕の思い出を締めくくってくれました。

13. おわりに

本来、この海外滞在記は、海外で学んだ異国文化を紹介するものであるべきですが、ただの思い出話を書き連ねた物となってしまう、期待して読まれた方には申し訳なく思っております。ただ、僕にとってアメリカで過ごした9ヶ月は、おそらく僕の人生の中で最高の思い出となるとともに、目的であった“英語に対する苦手意識の克服”もかなりの部分達成ができたと思っています。僕はただ楽しんでただけでしたが、研究等それぞれの目的に応じて、色々な可能性が潜んでいると思います。これからのこの海外滞在記を楽しみにしています。

最後に、僕に期待して迎えていただいたMasoudと、紹介していただいた古橋武先生には、本当に申し訳なく思うとともに、この機会を与えていただいたことを深く感謝いたします。

[問い合わせ先]

〒514-8507

三重県津市上浜町1515番地

三重大学工学部電気電子工学科

吉川 大弘

TEL: (059) 231-9396

FAX: (059) 231-9396

e-mail: tom@ts.elec.mie-u.ac.jp